

巻頭言

「教会の教理を持つだけでは十分ではない。経験的に存在している諸教会の社会学ももたなければならない。したがって神学的教理と社会学的診断の間の緊張から、状況に対するキリスト教的視点は出来上がってくる。教理なき診断は諦念に至る。これは悪い。しかし、診断なき教理はほとんど幻想に至る。これはもっと悪い（ピーター・バーガー）」

2011年3月11日に発生した日本における地震観測史上最大のM9.0を記録した巨大地震はその揺れと津波により、死者・行方不明者合わせて18535人の命(2013年10月10日現在、警察庁発表)を奪った。またその制御不能の力は現代科学技術の粋を集めた福島第一原子力発電所に壊滅的なダメージを与え、日本を、いや世界中を震撼させた。

それから2年半が経ち、あの記憶が風化しようとしている今、本号において東日本大震災をテーマとして取り上げられることは実に意義深いことだと言わねばならない。だがこういうとある人は言うかもしれない。曰く「それはあまりにもジャーナリスティックではないか」曰く「福音主義神学会はより学究的なテーマを模索すべきではないか」それらの意見には確かに一定の道理はあるだろう。だが冒頭に引用したバーガーのコメントにあるように、特定状況に対するキリスト教的視点は神学的教理と社会学的診断の緊張、あるいは動的な関係から生まれてくることを鑑みると、今号の総テーマ、東日本大震災は「取り上げてよい」課題ではなく、今「取り上げるべき」課題に他ならない。

本号所収の論文は、それゆえに学際的な広がりを持っている。冒頭の西岡論文は今回東日本大震災において福音主義に立つ教会がそれぞれの被災地支援という実践のバックボーンにあった福音主義の運動であるローザンヌ運動とその

発展について歴史的に叙述している。人間は社会的実在であると同時に歴史的存在であり、その人間の集まりである教会もまたその流れの中に存在するということを考えるとき、これは実に有益な価値を持つものである。西岡論文との関係性で考えるならば小平論文はより体験的な次元から語られてはいるが、阪神・淡路大震災の被災者にして東日本大震災においては所属教団、JEAの両者において災害支援を担当した生の体験から得たキーワードがやはりローザンヌが指向している「コミュニティ」と「ネットワーク」であることは興味深い。また被災の体験を通し自らの信仰的成長を感じるようになったという述懐には岡村論文との共鳴を感じさせる。

渡辺論文は被災地と様々なかたちで関わったキリスト教各派のリーダーたちにインタビューを行い、それらを4つのカテゴリーに分けたうえで詳細なレポートを行い、現代日本における宗教が私事化しているという状況を見出し、本来キリスト教が持つべきダイナミズムを取り戻すために、マクロなレベルでの支援を行っていくことの重要性を指摘しており、他方岡村論文においては調査対象をキリスト者である大学生に限定し、質的研究の視点から震災ボランティアが彼らの心にショックを与え、それが彼らの信仰を模造された紋切り型のそれから、一步進む契機を提供していることを主張し、ボランティアやフィールドワークは被災地の支援という一方向からだけで捉えるべきではなく、キリスト者である大学生の信仰成長に有益であり、この双方向性に着目すべきだと提言している。

関野、水草両氏の論文は原発に関するものであり、両氏ともに「反原発・脱原発」という基調音を共有している。しかしそのアプローチは水草論文が聖書の証言を「眼鏡」にし、我々キリスト者にも安易で便利のみを貪ってきたことからの悔い改めを正面から求めているのに対し、関野論文では自然科学の歴史を概観しながら、エコロジーの世界などでは良く受け入れられているリン・ホワイトの「環境破壊の元凶となったのはキリスト教である」というテーゼを修正しつつ、同時に創世記における「地を支配せよ」とのメッセージを深化させてこなかったことを反省している。また日本における反原発運動の第一人者で

あった高木仁三郎をはじめとする多くの科学者の見解を紹介し、この領域について更なる理解するための良い道筋を提供している。

嘗て諸学の女王と呼ばれた神学も、昨今では政治家が多分に揶揄の意をこめて「神学論争」ということが一般化しつつある。実に残念である。だがそれは彼らの神学についての無知を露呈している。というのも我々が求める「福音主義神学」は彼らのいう「神学論争」のごとき空中楼阁のごとき不毛の議論では断じてないからである。それは時々刻々変化する固有の状況の中で生まれる、神の民の生きた営為であり、使徒の時代から連綿と続いてきた善き伝統である。東日本大震災によって大いに揺れ動き、今なお揺れ動くこの地に立ち続ける我々が、語ることを失わず、なお主の業に堅く立ち続けることが出来るよう、本学会のコミュニティとネットワークがますます主にあって堅く結ばれることを願いたい。

(福音主義神学会東部部会理事長 大坂太郎)